

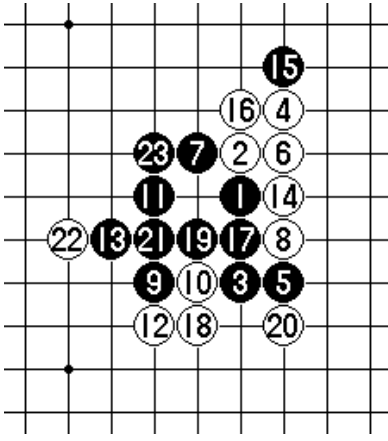
連珠っておもしろい

九段 河村典彦

● 第5回 ● 最善を尽くす

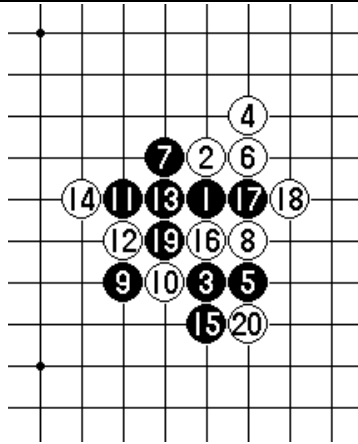
ひよんなことからの、正月の三上杯に参加することができた。久々の大会だったが何とか実戦勘を取り戻し、4勝0敗で優勝することができた。今回はその大会を振り返ってみよう。

黒勝九段 河村 典彦
白 六段 久富 隆洋
黒23にて白投了



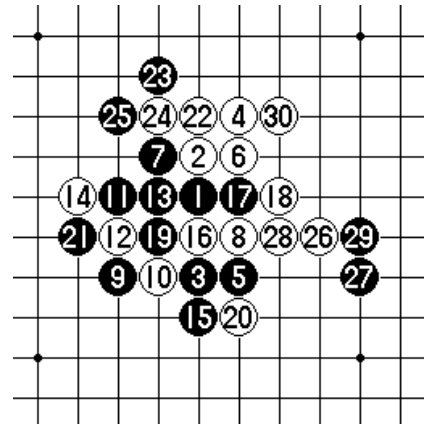
久富さんの白8はもちろん手続き忘れで、悪くても明星の定石に戻る。実際に

打つのは初めてだったが見た記憶を頼りに黒9、11と打った。これで白の筋が牽制されていると思っていたが、心配していた防ぎもあった。しかし白の久富さんはもうあきらめたのか白12と打ち、以下黒23までで投了となった。しかし、対局中読みきれなかったのが次の筋。



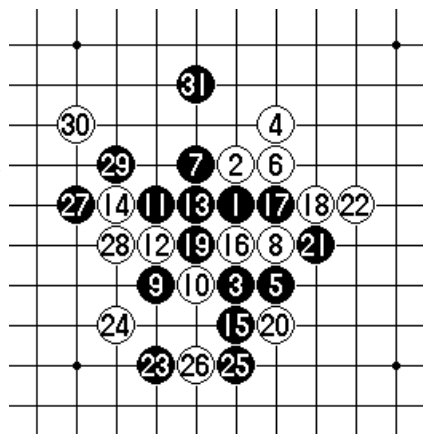
白12と飛び込んで、あとは自然に防いでおく。すると白20までは必然となり、さあこれから黒が勝てるかである。一見簡単に勝てそうだが、白のノリ手があり、難しい。

例えば、黒21と打ち、黒23、25で返しても、白は26から四追いが残っている。



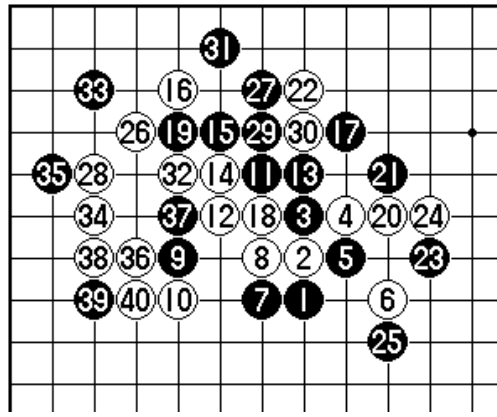
黒21と先手で止めても白22でまだ牽制が残っている。

黒23から今度は上辺に活路を求めても、白32のノリ手でうまくいかない。こんなに大変なら明星の定石に戻した方がマシか?と思いき死に探したのが次の図。

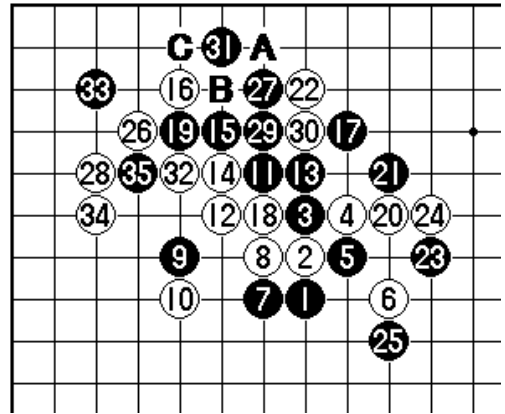


黒23と打つのがミソで、黒25に石が入れば黒27が打て、以下四追いになる。いずれにしろ、白は12の時点であきらめず、最善を尽くせば勝機もあったかもしれない。連珠というものはそう簡単に負けるものではない。そう簡単に勝てるものではない。あきらめた方が負け

ると思ってもいい。
 黒 八段 石谷 信一
 白勝九段 河村 典彦
 白40にて黒投了



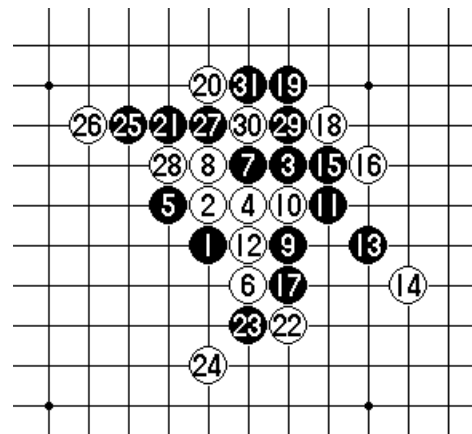
最終局の石谷戦では、寒星を指定した。白14で混戦に、白18で有利になったが、白32からの攻めに黒は最善を尽くしていない。黒35では白36とされて、以下どう受けても容易である。実戦は白40で投了となった。こは、次図のように止めていけば先手で、それから防げばまだ難しかった。



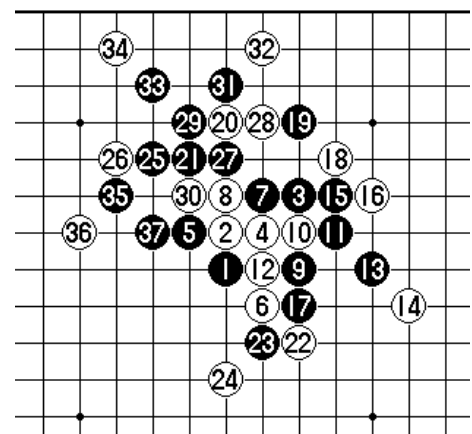
黒35と止めれば、以下ABCの四追いが残る。これに対し白は何か防がなければならぬから、黒もう一手下辺に手がかけられるという具合である。

最後に、山口名人との一戦を見てもらおう。
 黒勝九段 河村 典彦
 白 名人 山口 真琴

黒31にて白投了
 疎星で白8の作戦は彼らしいと思つたが、白10は意図外だった。白16はノータイムで打たれたが、ちよつと



損な気がする。しかし、疎星の白番ならじつくり行つて不満はない。白22、24が名人らしい防ぎで、上辺でしか黒は勝つ所がない。そこで黒25と工夫したが、白26と付き合われ依然勝ちが見つかからない。しかしその次の白28が敗着となった。黒31の三ヒキが予想外だった。以下白はどちらに止めた。以下白は勝ちとなる。局後の検討では、白28は次図の場所が最強ということになり、以下考えられる展



開が黒37までである。これなら黒はぜんぜん自信がない。
 蛇足ながら、黒21で欲張ると、白22が強烈な四追い含みとなりマズイ。

